



# 御旅所



川崎ゆきお

木陰の休憩所として、何人かが立ち寄る場所がある。当然散歩の途中に休憩するためだが、実際には会話を楽しむのが目的のようだ。

その人たちは休憩所と呼んでいるが、そういう施設があるわけではない。公園横の空き地だ。余地と言ってもいい。道が少し膨らんでいる。公園にはベンチがあり、そこで休憩してもいいのだが、小さな子供を連れた母親たちがおり、そのテリトリーになっている。

木陰の休憩所に来ているのは老人が多い。

「暑さが抜けましたなあ」

「いい気候になりました」

「暑さが抜けて、体が楽になりましたよ」

「いやあ、私は夏バテでね。暑いときは暑さで忙しくて、何ともなかったのですが、涼しくなってくると、急にきましたなあ」

しかし、ここまで歩いて来られるのだから、大したことはないのだろう。

「私は持病がありましてねえ。暑いとき、そちらに気も身体も取られていたんでしょ、持病が消えていましたよ。今は復活していますがね」

この人の持病も軽いのだろう。

「ところで、ここは何処なんでしょうねえ」

「おやおや、竹田さん、季節の変わり目でおかしくなりましたか」

「いやいや、番地まで言えますよ。それより、この場所ですよ」

「ここは御旅所跡ですよ」

「御旅所。まさかあの世へ旅立つときの待合所じゃないでしょうねえ」

「もうなくなりましたが、あの公園の端に神社があったのですよ」

「ほう」

「祭りで、御神輿が出るとき、ここが基地だったんです」

「ああ、町を練り歩く前の」

「もう神社もなく、村もなく、当然村祭りもなく、御神輿もありませんがね」

「よくご存じで」

「ここに引っ越したのは古いですから」

「じゃ、ここは神様が旅立たれるところですか」

「旅と言っても村を回るだけの旅ですがね。威勢のいい若者や、子供なんかがたくさん集まってきましたなあ。ここでおにぎりが配られたり、お茶が出たりしました」

老人たちは暗黙のうちに、自分たちの旅立ちが頭に浮かんだ。

「これは冗談なんですかね」

「え、何でしょう」

「この町を旅立った人がねえ。あっちを回って、戻ってくるらしいですよ」

「あっちで？」

「私たちがいずれ行くところですよ」

「はいはい」

「だからですねえ。ここにいると、そういう人たちも来ているような気がします」

「ほう」

「お寺さんじゃ、人は仏様になる。神道ではどうなんでしょうなあ。お盆に先祖が帰って来るように、村祭りのときに戻って来るような気がします。家じゃなく、この御旅所に」

「ほう、それは冗談ではなく、本当かもしれませんなあ」

「だから、私はここを聖地だと思っております。特別な場所です。ただの休憩所じゃなくてね」

「はいはい」

「もうすぐ秋祭りです。祭りはありませんが、戻ってきますよ」

この人たちは、そういう勝手なことを言って楽しんでいるようだ。

了